

文化

花と子ども
画家いわさきちひろ
生誕100年

松本 猛

⑰

至光社のオーナー編集長、武市八十雄は1967年に海外出張から帰国するなり、ちひろのもとを訪れてこう言った。「岩崎さん！ 絵本でなければできないことをしよう。画集でもなく、紙芝居を集めて綴じたものでもなく、物語にさし絵をつけたものでもない絵本を！（中略）映画でも、テレビでも、芝居でもない『絵本の世界』という海に船出しませんか」（「いわさきちひろ作品集6『ぎんいろの童画集』」より）。欧米に絵本を売り込みに行ったものの厳しい評価を受け、悔しくて夜も眠れなかったという。

ちひろは65年から本格的に物

新しい絵本作り

実験劇場 気楽にのびのびと



いわさきちひろ「あめのひのおるすばん」に使われている「窓ガラスに絵をかく少女」（至光社提供）

語絵本を描くようになっていたが、その仕事に満足していなかった。至光社の絵雑誌「ごども」のせかいでは10年来、毎月のように武市と仕事をし、互いに評価し合い、気心の知れた関係だったが、絵本制作を一緒にしたことはなかった。武市は、福音館の松居直が物語絵本に向かったのに対して、印刷の質にこだわり、絵を重視して感性に訴える絵雑誌づくりに力を注いでいた。

ちひろは、当時のことを「駄作でいい、なにか気になる絵本を作ろう」という武市の言葉で、気楽にのびのびと描けたと回想している。この絵本の基本部分は、わずか5日間で作成した。

「あめのひのおるすばん」は留守番をする少女の微妙な心理をにじんだ色彩と表情で表し、構図と展開を工夫した映像詩のような絵本となった。この絵は母親の帰りを待ちわびた少女が、曇った窓ガラスに絵を描いている場面である。画面の右手には、傘をさした母親らしい女性を描かれている。少女の周囲には複雑な色のにじみが広がる。このうるんだ色面は少女の心を映している。

実は、ガラスの絵と少女は別の絵で、印刷の段階で合成している。ちひろは至光社での絵本制作を実験劇場と呼んでいた。この絵本は絵本史にも残るちひろの代表作となった。

（美術評論家）

〈土曜日に掲載します〉